

青空に一筋の飛行機雲

岡野 健

広島市で被爆 当時 十五歳

一九四五年（昭和20年）八月、私は、広島市の修道中学校三年生で、比治山南東端にあった陸軍兵器補給廠に学徒動員で勤務していました。

八月十五日の朝は、雲一つない青空で松林を通りくる風は、万一の時に兵器補給廠の垣根を壊して、弾薬、兵器を移す非常口を作っている私たちには爽やかでした。学友の声につられて空を見上げると、南東から北西に一本の飛行機雲。広島のを通りすぎた先端に白くピカリと光るB-29を見た瞬間、何万ものフラッシュがたかれた様な光に驚き、耳と

目を両手でふさぎながら伏せまし

た。何秒かすると身体全体が熱く感じて四本の指をそつと捻げると、右から左に青色、黄色の炎が流れて見え火薬庫が爆発したと思いい立ち上がりました。光はもうなく、真っ白な一寸先が見えない霧中の感じで、しかも数秒間物音一つない静寂の世界がありました。近くの防空壕などから女学生や女子挺身隊員の悲鳴。熱線で水蒸気による白い視界も薄れ始めた頃、左手甲に暖かいものを感じ、見ると自分の左上半身は拳大の火脹れが裂けて汁が流れていました。身体全体がカッカ、カッカと火照り、

まだ爆音がするので比治山の横穴防空壕へと。横穴防空壕はヒンヤリしておりしばらくだが心地好い。またカッカ、カッカするのを学友が作業衣で煽いでくれると心地好い。扇風機でないので疲れると選手交替する間は、またカッカ、カッカ体が燃えるようでした。学友が火傷には油が良いと祖母が言っていたと、兵器庫に探しに行くも、見当たらなかつたと言つて、三八銃の錆び止めのグリスで治療してくれました。火薬庫も建っていたし何処も爆弾による穴が開いてないので、電線に何か仕掛けられて爆発されたとか、日本にはマツチ箱一個の大きさで、戦艦大和級が轟沈（ごうちん）出来る爆弾が出来たから日本は負けなと言つてたから、宇品港から運ぶ途中で爆発したのではないかと、中学生らしく話す